芦名定道

前期：現代キリスト教思想研究１――近代から現代へ

オリエンテーション――現代キリスト教思想の諸動向
１．西欧近代とキリスト教
２．自由主義神学１――シュライアマハー
３．自由主義神学２――リッチュルとハルナック
４．自由主義神学３――トレルチ
５．ヘーゲルとヘーゲル主義
６．近代聖書学と宗教史学派
７．キリスト教と社会主義
８．弁証法神学１――バルト　6/13
９．弁証法神学２――ブルトマン　6/20
１０．弁証法神学３――ティリッヒ　6/27
１１．解釈学的神学とブルトマン学派　7/4
１２．研究発表：岡田勇督、齋藤伎璃子　7/11
１３．研究発表：山田奈緒美、張旋　7/18
１４．研究発表：山下毅、山本恵美　8/1

＜前回＞近代聖書学と宗教史学派

（０）トレルチ・宗教史学派の神学

８．歴史的方法の特徴：方法、認識、存在、歴史主義
９．「宗教史学派の教義学」(Die Dogmatik der "religionsgeschichtliche Schule", 1913)

（１）近代聖書学

１．パネンベルク「聖書原理の危機」
２．19 世紀におけるイエス伝研究とその挫折（シュヴァイツァーの総括）→懐疑主義
・イエスは初期ユダヤ教の超自然的終末論的メシア王国待望に生きた人物、従来の倫理主義的イエス観とは異なるイエス像。徹底的終末論（第 15 章～第 21 章、邦訳では中巻）
・先行する 70 人の研究者のイエス伝研究を取りあげる（ライマールスからヴレーデまで）。
・「合理主義神学や、自由主義神学や、近代的神学が築きあげたキリスト教の史的基礎は、もはや存在しない。しかしそのことは、キリスト教がそのために史的基礎を喪失したことを意味するものではない。史的神学が遂行しなければならぬと信じ、しかも完成に近づいた瞬間に粉砕されるのを見た研究は、あらゆる史的認識と弁明から独立の、真の、不動の史的基礎の煉瓦装飾にすぎない。」

（２）宗教史学派

１．「宗教史学派」（Religionsgeschichtliche　Schule）：1880 年代、アルブレヒト・リッチュル（1822-89）。リッチュルに対立して新しい方向を目指して動きだした。指導者は、旧約のグンケル、新約のブーセット。神学者トレルチのこの学派に含まれる。
５．一般向きの学術冊子の刊行（内国伝道的活動）、『宗教史学的国民読本』
６．聖書の一般的講解シリーズ：
７．R.G.G（Die Religion in Geschichte und Gegenwart）の刊行、第一版 1909-13
８．リッチュル学派：二焦点楕円、神の国＝宗教と道徳の発展によって地上に実現されるべきもの・人間の道徳的努力の必要性。
９．教会的な枠組みからの脱却、諸宗教や文化の広い文脈から得られた材料と比較し関連

づけてキリスト教を研究する。
10. 終末論的聖書解釈：ヴァイス
地上的・発展的・道徳的秩序に立つ神の国
→　超越的・奇跡的・突発的な神の一方的な働きによる神の国
11. 文体的・類型論的研究：様式批判、資料仮説
12.「神学的・教義学的解釈を退けて、聖書の各文書を歴史的・時代史的に見、同時代または先行する時代と比較しつつ、影響を尋ね、文書や思想の系統を捕えつつ歴史的・宗教史的に解釈してゆく」(38)。
13. 宗教史学派の神学→歴史主義的。楽観的な人間理解。近代キリスト教神学の到達点。

７．キリスト教と社会主義

（1）問題――近代の政治思想としての社会主義

１．近代という時代の政治状況：国民国家の形成とグローバル化の進展、啓蒙主義
啓蒙主義の自由と平等を普遍的理念　→
アナーキズムや自由主義から社会主義、そして共同体主義に至る、近現代の主要な政治思想が共有する問題圏。
２．社会主義：近代の歴史状況を端的に反映した政治思想。
一方で、個人主義的自由主義を批判するという点で、様々な共同体主義と結びつくものとなると同時に、他方では、自由主義の徹底化という点で、アナーキズムやリバタリアニズムとも合致。
３．19 世紀から 20 世紀にかけてのキリスト教社会主義や宗教社会主義の一連の試み。
→　近代以降のキリスト教政治思想と社会主義の関係

（2）キリスト教社会主義とその限界

４．社会主義：近代――欧米諸国による国民国家モデルと世界覇権の形成――以降に登場した広範な諸思想・諸運動を含む理論群。
近代の自由主義的資本主義的社会秩序の進展によって発生した諸矛盾（貧困、劣悪な労働環境など）を社会変革（改良から革命まで）や社会的共同性・相互性によって克服することを志向し、人間的生の全体における自由と平等（政治的平等から経済的平等への拡張を含む平等主義）を内容とする道徳的正義と幸福の理念との実現をめざす。
５．現実の問題への実践的取り組みを理論化：イギリスのキリスト教社会主義運動の歴史的文脈。
イギリスにおける団結禁止法（1800 年）への反撃は、まず、1802 年の工場法（若年徒弟の労働時間を 12 時間に制限）となって現れ、1824 年の団結禁止法撤廃を経て、八時間労働制の確立――1917年にロシア革命後のソ連で導入され、1919年のＩＬＯ第1号条約として確立する――に至る。これは、社会主義の進展と一つの歴史的プロセスを形成していた。
６．キリスト教社会主義：英国国教会に所属する思想家たち（F.D.モーリス、C.キングスレーら）に指導された社会改良運動。共産主義的な社会主義とは異なり、信仰に基づき、隣人愛と神の前の平等というキリスト教的理念の社会的実現を目指す。
職能別組合や消費組合などの各種の相互扶助の組合運動、そして労働者教育（隣保館・セツルメント事業、労働者大学）を推進。
↓

キリスト教信仰に基づいた社会正義への理論的また実践的な取り組み
イギリスを超えて同時代のアメリカやスイス、ドイツ、そして日本へ。
第二次世界大戦後のフランスの労働司祭運動や解放の神学。

７．アメリカの「社会的キリスト教」

1880 年代、アメリカの神学校を中心に生じた神学運動（片山潜(1859-1933)が留学したアンドーヴァ神学校はこれに含まれる)。

南北戦争後、19 世紀後半のアメリカ：資本主義経済の発展にもかかわらず、貧困問題と労働問題という深刻な社会問題。社会的キリスト教は、こうした社会状況に対して無関心なキリスト教への批判・反省を求め、19 世紀の近代聖書学の展開によって崩れ去った聖書の無謬説に代わる、新しい神学建設の要請に応えることをめざす。

８．社会的キリスト教の思想的特徴（隅谷、1977、21-22)。

（１）神の内在性の強調。進化プロセスにおける神の内在を認め、宗教の目標は世俗世界（地上）における良き生活（神の国）の実現に置かれる。

（２）罪人としての人間観の否定。人間の不完全さや欠陥は、理性によって改善可能であり、その原因は社会的矛盾にある。

（３）隣人に対する自由な奉仕の象徴としてのキリストの十字架の強調。キリストの贖罪思想は後退し、キリストの愛へ強調点が移る。

９．アメリカの教派を超えて進展していた「社会的福音」(social　Gospel)の主張と一致。

10. 明治期の日本キリスト教と近代日本の政治・社会的状況。

自由民権運動（おおよそ 1870-80 年）への積極的な関与、キリスト教的な戦争論の展開（内村鑑三の非戦論など)、足尾鉱毒事件への取り組み、そして、労働運動・社会運動への先駆的で指導的な関わり。→日本のキリスト教社会主義

11.「日本の社会主義はキリスト教を一母胎として生まれ、活動してきた。しかしキリスト教界の大勢は社会主義に消極的であり、日露戦争では見解が全く対立した。社会主義者はキリスト教が次第に自分たちと敵対する支配層の側に立ち、それに奉仕する宗教であると断定するようになった。これに応じてキリスト教社会主義といわれる人たちの中に自己分裂が生まれてきたのである。」（土肥、1980、218）

12. 明治日本の状況下、キリスト教信仰と社会主義思想との両方を保持し続けることは困難。片山潜、石川三四郎、安部磯雄、木下尚江らの中で、キリスト教信仰を保持し続けたのが、安部磯雄だけ。

13. チャールズ・Ｅ・ガルスト(Charles Ekias Garst、1853-1898)、ディサイプル派(Disciples)の最初の宣教師として来日(1883)、日本の農村の貧困問題から社会問題全般に取り組んだ。

1884 年から秋田で伝道を開始。東北農村は厳しい困窮の中にあった。

14.「明治の土地問題の端緒は、六年の地租改正にあった。わが国資本主義の本源的蓄積に決定的役割を果したこの土地改革は、幾多の問題をはらんでいた。第一に、地価の百分の三と定められた税率が高率なことは、政府自身が改正条例の中に認める所であり、徳川時代の旧法による場合とほぼ等しいものであった。」（工藤、1996、33）

・封建的年貢に等しい税率は重い負担（＋現物納から金納への変化）→不況による自作農の没落→小作農は政府の地主優遇政策から取り残され、全国各地で農民による暴動が頻発。

・明治期に進展する日本の資本主義経済：農村からの収奪による資本の蓄積に大きく依存していた。

15．ガルストの伝道方針：「かれら農民に福音を聞かせるためには、かれらの貧困の問題をともに考え、その解決に努力することが必要」（同、114）との認識に基づいた、「すべての神の子たちを、神の食卓につける計画」（同、42）。

↓

地租増徴論（地主への増税による産業資本家の負担軽減）を主張（地租軽減論は小作人を利するところなく、地主の利益になるのみ）

ヘンリー・ジョージ(H.George)の土地単税論：

南北戦争後の恐慌による社会問題の発生の根源には土地の独占があるとの認識。

「地主の不労所得である地代をすべて社会に没収し、これを国家の唯一の財政収入としようという土地社会主義」（同、50）。

16.「天は主のもの、地は人への賜物」（詩編 115 編 16 節）との聖書の言葉に基づいて、神によって与えられた土地に対する万人平等の権利を主張し、地主による土地独占を批判する。

「ガルストの単税論における根本原理は、人が生まれながらにして与えられた自由をば、それを阻碍するいっさいのものを排除して獲得しようとする」（同、90）との「自然法思想」　＋　土地使用の自由と平等における神の義の実現という信仰的確信

17．社会問題研究会や社会主義研究会の発足に立ち会い、足尾鉱毒事件について講演を行うなど、明治日本の社会運動に実践的に関与。地租増徴案の帝国議会通過を見届けた後、1898 年に永眠。

18．ガルストの土地単税論（キリスト教信仰と社会主義的経済理論との結合）

広義に解したキリスト教社会主義（社会的キリスト教、社会的福音、狭義のキリスト教社会主義を包括するキリスト教的な社会思想）の典型的議論。

19．キリスト教社会主義の限界。

・「ガルストは地主への反感から増徴論を積極的に支持した。その結果、三一年一二月の地租増徴案の可決となったが、増徴された地租が小作料として小作人に転嫁され、小作人の困窮をますます増大する危険を彼は見通すことができなかった。しかもその半面、地租増徴によって、これを財源とする産業資本家の育成が押し進められ、土地私有とは別個の独占が生ずることもまた彼は見抜きえなかった。ここに彼の単税論の社会改革思想としての限界が指摘される」（同、93-94）、「ガルストの単税論及びその運動は、一個の思想的啓蒙運動に終わった」（同、62）。

・最大の問題：キリスト教社会主義の理想主義が有した、社会的進歩への楽観的見方（楽観的な人間理解と歴史理解）、過度の心情主義。

Ｒ．ニーバーが、「愚かな光の子」として指摘した問題。

「われわれにとって今日特に関心を唆られるのは、第一次世界大戦後のティリッヒやニーバーによって提唱されつつあるキリスト教社会主義であって、そこには従来の所謂キリスト教社会主義の福音信仰を逸脱する『社会的福音』の立場と呼ばれる安易な楽天的な内在主義に対する厳しい批判的態度が見られる。そしてそれがバルト神学の超越主義と既往の自由主義的なアングロ・サクソン神学とに対決するという意味をもっている点で注目される。」（武藤、1955、27）

20．キリスト教社会主義が 19 世紀の楽観的進歩主義的な人間理解の枠内に留まるものであった。人間の深刻な罪について適切な洞察を持ち得なかった、20 世紀の二つの世界大戦という現実に対して十分な対決をなし得なかったこと。

21．20 世紀の現代神学における現実主義の潮流。しかし、19 世紀の自由主義神学あるい

はキリスト教社会主義への全面的否定論は、極論か。
22.「現実」(the real)とは何か。
　ティリッヒ：歴史的現実を構成する力であるが、この力をどのように捉えるかに従って、素朴現実主義、理想主義、現実埋没的現実主義、信仰的現実主義の四つの類型を提示。
23. Idealismus は、観念論であると同時に理想主義であった。
　　理想を失った現実主義？

＜補足＞

　ヘンリー・ジョージと社会主義との関わりについては、やや微妙な問題点が存在する。ヘンリー・ジョージは、リカードの差益地代論（地代の増加は社会の進歩によるものであり、地代は社会に帰属する）に依拠しつつ、単税（the Single Tax Principle）論を主張したが、彼によれば、この単税論は、個人の労働によって増大する資本を社会帰属を説く社会主義とは異なるものとされ、ヘンリー・ジョージ、そしてガルストも自らは社会主義者でないと主張している。つまり、社会主義の概念規定にもよるが、両者の意識にしたがえば、二人とも狭い意味の社会主義者ではないと言わねばならない。しかし、ヘンリー・ジョージの単税論は、イギリス労働党の創設に関わった社会主義者ケア・ハーディに影響を与え、またガルストが日本の勃興期の社会主義運動に直接関与したことなどを考えれば、ガルストを広義のキリスト教社会主義に含めることは十分に可能と思われる。広義のキリスト教社会主義とは、モーリス、ハーディ、ヘンリー・ジョージ、そして片山潜といった人物が織りなすネットワークとして理解できるであろう。

＜参考文献＞

１．Peter Scott and William T.Cavanaugh(eds.), *The Blackwell Companion to Political Theology*(2nd edtion), Wiley-Blackwell, 2008.
２．芦名定道「近代／ポスト近代とキリスト教―グローバル化と多元化―」、『キリスト教と近代化の諸相』(「近代／ポスト近代とキリスト教」研究会）研究報告論集・創刊号、2008 年、3-18 頁。
３．"Sozialismus," in: Joachim Ritter und Karlfried Gründer (hrsg.), *Historisches Wörterbuch der Philosophie, Bd.10*, Schwabe & Co, 1998, S.1166-1210.
４．武藤一雄『宗教哲学』日本ＹＭＣＡ同盟出版部、一九五五年。
５．土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、1980年。
６．隅谷三喜男『片山潜』東京大学出版会、1977年。
７．工藤英一『単税太郎Ｃ・Ｅ・ガルスト――明治期社会運動の先駆者』聖学院大学出版会、1996年。
８．L.D.ガルスト『チャールズ・Ｅ・ガルスト（小貫山信夫訳）――ミカドの国のアメリカ陸軍士官学校卒業生』聖学院大学出版会、2003年。
９．Renate Breipohl, *Religiöser Sozialismus und bürgerliches Geschichtsbewußtsein zur Zeit der Weimarer Repblick*, Theologischer Verlag, 1971.
10. Kurt Nowak, *Evangelische Kirche und Weimarer Republik. Zum politischen Weg des deutschen Protestantismus zwischen 1918 und 1932*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1988.
11. 宮田光雄『政治と宗教倫理』岩波書店、1975年。
12. 金井新二　『「神の国」思想の現代的展開――社会主義的・実践的キリスト教の根本構造』教文館、1982年。